

## 土佐光信筆「硯破草紙絵巻」研究

河合 由里絵 (神戸大学)

本発表では、室町時代後期に宮廷絵所預を務めた土佐光信(1434~1525)の「硯破草紙絵巻」(細見美術館)を取り上げる。本絵巻の物語は、ある屋敷に仕える若侍の中道が、主人である大納言の愛玩する硯を盗み見ていたところ落として割ってしまい、その罪を肩代わりした若君が父親の大納言により勘当されて追放先で亡くなり、息子の死を嘆いた父母と罪を告白した中道が出家するというものである。巻末には、明応4年(1495)の時点で室町幕府第11代將軍の足利義澄(1480~1511)が本絵巻を所持したことを示す奥書が付される。

メリッサ・マコーミック氏は、物語における中道と若君との関係性について、愛する稚児の死を契機に発心する男性僧侶を描く文学ジャンル『稚児物語』との類似を指摘し、管領の細川政元(1466~1507)が当時同じ邸に住まわせていた若將軍の義澄に対し、若いパートナーの犠牲により深められる男性同士の関係を学ばせる目的で本絵巻を制作させた可能性について示唆している。本発表では、同氏の見解について再考察を行い、本絵巻の詞書と絵画を丁寧分析し直すことで改めて受容者の義澄による本絵巻の鑑賞の様相について明らかにする。

まず物語の焦点について分析を行う。本絵巻を含めて六種類が現存する同主題の説話を比較し、本絵巻が「若君の死に対する家族の悲しみの様子」を強調して描いていることを指摘する。加えて、第二段では亡くなった若君のもとに家族三人(父・母・乳母)が集結し、第三段では若君の死を契機として家族が三方向に分散してゆくという絵画化のあり方について、同主題の説話の中でも特異な「硯が三つに割れる」表現との繋がりを指摘する。よって本絵巻の物語の焦点とは、家族が離散してゆくことであると推測する。

本絵巻の受容者である足利義澄の経歴を確認すると、本絵巻に署名を施す四年前には、父・母・弟・義父などの家族や近い間柄の人々を相次いで亡くしていることが分かる。よって上記のような家族が離散する描写は、当時16歳であった義澄にとり、幼い心に強く響く描写であったことが推察される。加えて、本絵巻の詞書における「七歳」で「嗟峨」へ追放される若君の設定について、同主題の説話では年齢と追放場所ともに著しく異なっていることから、本絵巻の詞書は「七歳」で「嗟峨」に送られた義澄の過去と共鳴させるべく編集された蓋然性が高い。よって本絵巻は、絵画と詞書ともに義澄の個人的な経験と重なる要素を多分に含んだ作品であると言える。

以上の分析から、「硯破草紙絵巻」は、先行研究に示されるように周囲の大人が若將軍を教育するための機能というよりも、所有者である義澄個人の内面と響き合う機能をもつことが分かる。本絵巻は、義澄の過去の悲しみを受け止め慰める機能をもち、またそうするべくして制作された作品なのではないか。